

---

えっ？ 平凡ですよ？？

はな

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

えつ？平凡ですよ？？

### 【Zコード】

Z3791W

### 【作者名】

はな

### 【あらすじ】

私の名前はリリアナ・ラ・オリヴィリア。オリヴィリア伯爵の第一子です。実は元女子高生な私が貧乏伯爵家に新たに生をうけ、ただただ今生の家族と自分が左団扇に暮らせるように現代の知識を活用していくうちに、自分が周囲からどう評価されてるにも気付かず、に平凡な今生を望む転生者の咳。

## 女子高生 橋 ゆかり

私の名前は、橋 ゆかり。

公立高校に通う女子高生です。  
うちは母子家庭で、お母さんが女手一つで育ってくれた。  
お父さんは、私が生まれる前に交通事故で亡くなっている。  
当時のお母さんは、精神を病み私を流産しかけた事もあつたらし  
い。

だけど、いつもお母さんの周りには人がいた。

お母さんの事を心配した親族や友人、職場の人達。  
そして私が、お母さんのお腹の中に常に一緒にいた。  
お母さんは人の優しさに触れ、徐々に生きる気力を取り戻し、私  
を産んだ。

そして、素敵な名前をつけてくれた。

- - - ゆかり - - -

私がお母さんのもとに、産まってきたのも運命という縁。<sup>ゆかり</sup>

そして、人と人の縁。<sup>ゆかり。</sup>

それを、大切にして欲しいとの願いを込めてつけられた名前。  
お母さんは、ちょっと照れくさそうに話してくれたよね。

お母さんありがとう。

そして、お母さんじめんなさい。

私は、お父さんの似なくていい所が似てしまつたみたい。

私は、今日車に轢かれた。

どうか、またお母さんに人の縁が集まりますよう。

それが、橘 ゆかりとしての最期の記憶。

× × ×

目覚めたらそこは、知らない天井でした。

えつ？ ここ何処？？

同時に、車が私に突っ込んできた記憶がよみがえる。

あつ私……事故にあつたんだ……。

と、いう事はここは病院かな？  
まさか助かるなんてさすが私。  
間違いなく、お母さんに心配かけちゃつたな。

うん、謝り倒そう。

とりあえず、体を起こそうとするが何故か起きない。  
事故が事故だつたから、足や肋骨が折れてるのかもなあーと思つたが、痛みはまったくないのが不思議だ。

今度は、自分の体の状態を確認しようと、手を動かしてみた。すると、視界に随分と小さな手がうつりこんだ。

こんな所に赤ちゃん？

なんて思つていたら、今度は20歳前半位の外国人美女が、憔悴仕切つた様子で近付いてきた。

何故に外人さん？？

しかも、白は白でもワンピースを着てるから看護婦さんじゃない。美女は、私を笑顔で覗きこんでいる。

„\*○¢£。§”

なんて言つてるんですか - - - - ! ?

明らかに日本語じゃないよ。

英語  
和日本語  
の比較  
—年譜編

でも知ってる単語なつたよ

どうか、二の状況は可！？

状況を理解する為に、美女を観察しようと彼女の大きな瞳を見つめる。

えつ?  
赤ちゃん??

美女の視線は、真っ直ぐ私に向かっている。  
私と美女の間に赤ちゃんなど勿論いない。

「 つづく 」

× × × (後書き)

美女の言葉の意味を理解出来ない内容へと変更させていただきまし  
た。

私の名前は、リリアナ・ラ・オリヴィア。

そして、私には過去にもう一つ名前がありました。

- - - 橘 ゆかり - - -

察しのいい皆様ならお分かりでしょう。……そう、私は異世界に転生したのです。

そして、あの時の美女は私の今世でのお母様でした。

赤ちゃん時代は元16歳には辛かつたです。  
羞恥プレイな葬り去りたい過去です。

しかし、なにより苦労したのは言葉。

一いちじりの言葉を喋るうとしても、日本語を言語としていた私には、  
外国語にしか聞こえなかつたのだから。

そなんです。

地球とは違う言語が、使用されていたんですね。

日本語が今は失われた古代語だったとか、おいしい展開はありませんでした。

最初から0の状態スタートの子供は、リンゴを食べて「リンゴ」

と覚えねばいい。

しかし、私はコンピュータをはじめて「コンピュータ」とこう単語をまるで英和辞典を引くかのように、日本語の『コンピュータ』と繋がる口わせなければならなかつた。

前世の記憶がある為につまれた弊害。

文字もまた一緒だつた。

だから私は、3歳でよつやく一つの単語、それもマーマ、パーパレベルしか喋れなかつた。

単語数もそれ程多くない。

心配したお父様やお母様は、私にいっぱい喋りかけてくれた。

そして、7歳でよつやく言葉を喋れるようになりました。

文字はまだ呑じこけどね……。

その頃になつて、自分の立場がよつやくわかるよつになつました。

なんと、私貴族の伯爵位の娘として生まれたみたいですねーー  
こりゃ左団扇だわーー 生活も安泰でなにより。

…………ん?  
…………つちボロくない?  
…………

原因わかりました。

私の今世の両親は、揃いも揃つてかなりのお人好しでした。  
商売をしたいが、元手がないという青年には、契約書もなしに金  
を貸し、持ち逃げされて行方不明。

怪しげな商人に、いい話があるが出資してみないかと言われれば、  
素直に出資して大損。  
等々etc……。

学習能力ありますか?? と、思わずツッコミたい。

私の両親は一人とも見た目極上、性格よし、聰明。  
なのに、少し考えれば分かる嘘もお人好しフィルターがそうさせ  
るのか、すぐに信じて騙されてしまう。

お陰で豊かな大地の領主でありながら、我が家は気付いたら火の  
車。

けれど、そんなお人好しな両親を私は嫌いじゃない。

むしろ大好きだ。

最低限しかいない、我家の使用人の噂話を盗み聞きすると、貴  
族という位についている人は大概、人を人と思わない人が多いらし  
い。

元日本人な私は、人権問題なんて歴史や漫画、小説の世界の話で  
しかなかった。

身近に感じた事もなかつたが、それが慣例になつているこの世界

で、当たり前に人を人と感じ、対等な立場で接する両親を誇りしく感じる。

火の車なのも、騙されたのもあるが、残りのお金を領民の生活が豊かになるよう、すべて領地に注いでいるからだ。

お父様は、毎日領地の査察をかかさず行い、時には畠まで耕す。

貴族の夫人は、家の事などしないのに我が家は、毎日お母様が家事をする。

そして、たくさんの愛情を私に注いでくれる。

そりやあ、子どもとしてはそんな両親のお手伝いしたいじゃない？？

私が、こうして前世の記憶持ちとして生まれたのも、意味があるので思つてている。

前世では、親孝行できなかつた自分。

元日本人としての知識、活用させていただきますー！

オリヴィア伯爵令嬢 リリアナ 2(後書き)

これからリリアナの奮闘?がはじまります(^-^)

豊穣の娘 リリアナ

今日は、フィルアという農村にお邪魔しています。

何故かつて？？

意氣込んだのはいいけれど、何から手をつければいいのか分からなかつたからです……。

そして、今さらですが私は家から出た事がありませんでした。家のまわりで遊んだり、探検したりはしましたよ。だけど、それ以上出た事はなかつたんです。なにせ、言葉を習得するのに必死でしたから。

そんな私は、歴史やこの世界の有り様を知りませんでした。

むしろ、現状の確認が必須じゃない？？

なので、領地の査察に行くお父様に、私も行きたいとおねだりをしてみました。

「リリアナ、遊びに行くんじゃないんだよ？」

お父様の弱点など、この7年でお見通しだ。

へうえ、私の必殺技を - - - - !

田を潤ませ、下からお父様を見上げ、首をかしげ、指を組んで額の下に添える。

「お願い攻撃は未だに負け知らず。

もちろん、私の不敗神話は更新されました。

我ながら将来が恐ろしい。

今日の査察は、うちから一番近い農村。遠方じゃないから、私を抱えたお父様と一緒に馬に乗りながら、ゆっくりやってきました。

同行者は、騎士のアレスさんです。

アレスさんは、飄々とした雰囲気のお兄さんで、お父様の補佐官でもあります。

フィルア村は、森に囲まれた長閑な農村で、家も30軒程の小さな村です。

その中でも、他の家より大きな家の前に立つとドアをノックする。

「ようこそお出で下さいました領主様。そして、アレス殿。今日は、随分とかわいいお連れ様もご一緒ですね」

人の良さそうな、朗らかとした男性がドアから現れた。

「お久しぶりです、ダグラス村長。今日は、娘のリリアナが一緒に行きたいと駄々をこねまして。リリアナ、彼はこのフィルア村の村長のダグラスさんだよ」

「ダグラスさんはじめまして、リリアナです。今日は、よろしくお願い致します」

村長さんは、小さな私にも笑顔で応じてくれた。

お父様と、領民の関係はどうなんだろうと気にしていたが、心配損だつたみたい。

まあ、領主がお人好しのお父様だしね。

「査察をしている間は、小さなお嬢様には退屈でしょう。私の娘と一緒に遊んでいただけませんか？ 娘もリリアナお嬢様と同じ年なんですよ。この村には、娘と一緒に年頃の子がいないので喜ぶでしょう」

え？？

村長さんはそう言つて、家の奥から少女を連れてきた。少女は、チヨコレート色の髪とくじつとした瞳をした可愛い雰囲気の子だ。

だけど、人見知りをするタイプだったみたいで、私を見て固まつてしまつた。

「はじめまして、リリアナと言います。あなたのお名前は？？」

少女は、バネで弾かれたみたいにビクッとした、頬を染めて笑顔になつた。

何、この可愛い小動物。  
ぜひともお持ち帰りしたい。

「私の名前は、ミーナつていいます」

「ミーナちゃん、一緒に私と遊んでくれる？？」

のほほんと一人で和んでいたら、じゃあいい子にしてるんだよ、  
と言つてお父様とアレスさん、村長さんが査察に行つてしまつた。

あれ？？ 私なんの為にきたんだっけ？？

すると、ミーナちゃんは私を家の中へ引っ張つて行く。

「リリア様、何して遊ぶ？？」

「ミーナちゃん、様なんてやめて。リリアナって呼んでよ」「でも、お父さんがリリアナ様とお呼びしなさい、って言つてたもん」

「私が、リリアナで良いって言つてるんだから、これからはリリアナって呼んでね。私はミーナちゃんって呼ぶから」

ミーナちゃんは、嬉しそうに私の両手を握り、リリアナちゃん何して遊ぶ？ と、目をキラキラさせながら、つかがつてくる。

隠れんぼは一人でやるよりもっと大人数の方が楽しそうし、トランプをやるにもこの世界におそらくトランプなんてないし、さてどうしよう……。

結局、あやとりにしました。

自分の発想力のなさに、げんなりです。

それでも、ミーナちゃんはあやとりは初めてだと言つて、楽しそうにやつていて。

いい子だ。

「ミーナちゃん、」この村の人はほとんどが畑を耕して生活してるの？」

「うん。獵師のおじさんもいるけど、畑で野菜とかを育てる人の方がいっぱいだよ、リリアナちゃん」

まだなれないあやとりを、一生懸命やりながらミーナちゃんが答えてくれる。

「森に困まれてるし、腐葉土もいっぱいありそだもんね。作物を育てるのことをやつ」「フヨウド？ リリアナちゃん、何それ？？」

「私が、リリアナで良いって言つてるんだから、これからはリリアナちゃんって呼ぶから」

「森に入った時、落ち葉の下が黒い土になつてない？ その黒い土をね、腐葉土つていうんだよ」

「えーと言ひながら、ミーナちゃんは相槌をひつ。

「落ち葉とかが腐つた土で、あとは灰も烟こいいんだよ」

……確か。

「リリアナちゃんは物知りなんだね」

ミーナちゃんはキラキラした目で私をみてくる。  
そんな純粋な目でみられたら、間違つてるかもしれないだなんて言えないじゃないか。

あやとつに熱中していたら、いつの間にか大人達が帰つて来てました。

「リリアナ、そろそろ帰るよ」

お父様が、私を連れて行いつとしたらミーナちゃんが大泣きしあじめた。

「リリアナちゃん。行つちゃいやあーーー！」

大泣きして、なんて可愛い事を言つんだ。  
やはりお持ち帰りしたい。

「ミーナちゃん、泣かないで。私は、またお父様と一緒に遊びに来るから」

ミーナちゃんに抱きつきながら、頬を真っ赤に染めながら、あのキラキラした目で見つめてくる。

「リリアナちゃん、またミーナと遊んでくれるの？」

「うん もちろん」

「じゃあミーナとリリアナちゃんはお友達だねーーー！」

ミーナちゃんは、また遊びに来てねーーーと、名残惜しそうにしながら、村の入口までダグラスさんと一緒に見送ってくれた。

私は、今世で初めての友達ができました。

あれ？ 私は何をしに来たんだっけ？？

## フィルアの村娘 ミーナ

私の名前は、ミーナ・フィルアです。

お父さんは、フィルア村の村長をしていて、うちは代々続く村長の家系なんだって。

今日は、領主様の査察があるから大人しくしているんだよ、とお父さんに言われてつまらない。

領主様は優しい人で、今の領主様になつて良かつたって、みんな言つてるの。

前の領主様は、こわい人だつたんだって。

査察にくるとき、領主様は時々ミーナにお菓子をくれるし、そんな人が悪い人なわけないもんね。

トントン、ヒドアのノックがした。

あつ、領主様が来たみたい。

お父さんは、すぐに領主様を迎えるために、玄関に向かつた。

今日は何して遊ぼうかなあ、と思つていろいろお父さんが家の中に戻ってきた。

「ミーナ、今日は領主様のお嬢様もきてるんだ。領主様と村をまわつてゐる間、一緒に遊んでくれないかい？ お嬢様はミーナと同一年なんだよ」

ミーナと一緒に！！

「この村には、ミーナよりもおつきいお兄ちゃんか、ちっぢやい子しかいない。」

だから、お兄ちゃんと遊ぶといつも置いていかれるし、ちつちやい子はまだ上手く歩けないし、喋れないから面倒を見る事になるの。

初めてのミーナと一緒に年の子。

「お父さん！ ミーナその子と一緒に遊びたい！！」

「ミーナはそう言つと思つたよ。お嬢様は、リリアナ様と言つんだよ。敬語は無理でも、ミーナもお嬢様の事を、リリアナ様とお呼びしなさい」

けいじが何かはわからないけど、その子をリリアナ様と呼べばいいんだよね？

「わかった！ お父さん早く早く！！！」

私は、お父さんの手を引っ張つて、玄関に向かう。玄関には、いつもの優しい領主様と騎士様。

そして、初めてみる女の子がいた。

天使様だあ！！

その子は、真っ白な肌に銀色のサラサラとした髪は触つてみたいほど。

何よりも瞳が綺麗な紫色なの。

領主様も同じ紫色で、確かお父さんがアメジスト色は、領主様の家系に出る色だつて言つてた。

その瞳が、すく綺麗に輝いてるの。

綺麗な、天使様みたいな子。

本当に人間？ と、思つてその子をずっと見つめてしまつ。

「はじめまして、リリアナと言ひます。あなたのお名前は？？」

天使様が喋つた！！

しかも、笑顔も眩しいよ。

この子は天使様みたいな人間なんだ。

「私の名前は、ミーナつてひいます」

緊張して上手く喋れないよ。

「ミーナちゃん、一緒に私と遊んでくれる？？」

天使様が、ミーナと一緒に遊んでくれるのー？

すゞい！ すゞい！！

じゃあいい子にしてるんだよ、と領主様が言つてみんなで出掛け  
ていつた。

私は、天使様の手を掴んで、家の中に連れて行く。  
天使様は、普段何して遊ぶんだろ？ 聞いてみよ。

あつ、リリアナ様つて呼ぶようにお父さんと言つてたんだつた。

「リリアナ様、何して遊ぶ？？」

そう言つと、天使様は困つた顔をした。

「ミーナちゃん、様なんてやめて。リリアナつて呼んでよ

「でも、お父さんがリリアナ様とお呼びしなさい、って言つてたもん」

「私が、リリアナで良いって言つてるんだから、これからはリリアナって呼んでね。私は、ミーナちゃんって呼ぶから」

天使様から名前で呼んでいいと言われました。

わあ〜リリアナちゃんかあ、天使様と仲良くなれたみたいで、すつごく嬉しいよ。

思わず、リリアナちゃんの両手を握りしめながら、リリアナちゃん何して遊ぶ？？ と、聞いてみた。

そしたらリリアナちゃんは、ミーナにあやとつと言つ遊びを教えてくれたの。

一本のヒモを輪にしたもので、リリアナちゃんの言つ通りに引っ掛けたり、外したりすると、ほつときやせじ「の形になつていいくのが不思議で面白かった。

「ミーナちゃん、この村の人はほとんどが畑を耕して生活してるの？」

「うん。獵師のおじさんもいるけど、畑で野菜とかを育てる人がいっぱいだよ、リリアナちゃん」

リリアナちゃんが、この村を好きになつてくれると嬉しいなあ、と思いながら答えた。

「森に囲まれてるし、腐葉土もいっぱいありそつだもんね。作物を育てるのによさそう」

「フヨウド？ リリアナちゃん、何それ？？」

フヨウドなんて初めて聞くよ。

「森に入つた時、落ち葉の下が黒い土になつてない？」 その黒い土をね、腐葉土つていうんだよ」

「へえ」と言いながら、森にある黒い土を腐葉土って言うんだね、初めて知ったよ。

「落ち葉とかが腐った土で、あとは灰も畑にいいんだよ」「リリアナちゃんは物知りなんだね」

કાર્ય-સા

腐葉土だけじゃなくて、灰まで畠にいい事を知ってるなんて、やつぱり、リリアナちゃんは天使様なんだね！！

それからも、リリアナちゃんとあやとつをしていたり、領主様とお父さん達が帰ってきた。

「リリアナ、そろそろ帰るよ」

領主様が、リリアナちゃんを連れて行こうとする。

「リリアナちゃん。行っちゃいいやあ～！」

せつかく、リリアナちゃんと仲良くなつたのに、お別れなんて嫌

た

気付いたら大泣きしちゃつてた。

「ミーナちゃん、泣かないで。私は、またお父様と一緒に遊びに来

るから」

リリアナちゃんは、私に抱きつきながら優しくそいつに囁いてくれたの。

リリアナちゃんは、柔らかくて、なんだか良い匂いがした。

「リリアナちゃんは、またミーナと遊んでくれるの？」

「うん もちろん」

リリアナちゃんがミーナとまた遊んでくれるといつは事は……

「じゃあミーナとリリアナちゃんはお友達だね……」

それから、リリアナちゃんを村の入口まで、また遊びに来てね！ と、寂しかつたけど我慢してお見送りをした。

家に帰ると、リリアナちゃんと遊べた事が嬉しくて、今日あつた事をお父さんにお話したの。

あやとりを実際にみせたり、腐葉土や灰が畑にいいんだって知つてた？ と、リリアナちゃんの白爛話をいつぱいしたんだ。

そしたら、お父さんが腐葉土？ って、詳しく聞きたがつてきたの。

普段ミーナが、お父さんに教わる事はあっても、逆に教える事なんかないからリリアナちゃんに教わった事を、そのまま教えたんだ。そしたらお父さんは、試してみる価値はあるな、とか言つてブツブツ考え始めちゃつてつまらない。

まだまだ、リリアナちゃんの話を聞いて欲しいのに。

じぱりへしたある日、お父さんがすゞいウキウキして帰ってきたの。

ミーナが、リリアナちゃんの話をした次の日からお父さんは早速、使ってない煙の一部を腐葉土や灰を使って作物を植えてみたんだつて。

そしたら、成長速度も早いし、作物も大きいものが育つていて、収穫量が倍増しそうだつて喜んで話してくれたの。

これからは、他の煙でも試してみて、良い結果がでたら村の煙のすべてに使用しようとか言つてた。

リリアナちゃんが、また村に遊びに来た時に、お父さんが試してみたら成長が良くなつて、喜んでた話をしたの。

そしたら、リリアナちゃん何故かほつ、としてたの。  
なんでだろ??

そして後に、リリアナちゃんに教えられた腐葉土と灰は、村の畑すべてに使用され、過去最高の収穫量となつたんだつて。

それを知つた領主様は、オリヴィア領のすべての村でその知識を広め、オリヴィア領は国の食糧庫と呼ばれる事になるの。

そして、村人の誰が言いはじめたのか、リリアナちゃんの事を『豊穣の娘』と呼ぶようになり、その一つ名は、リリアナちゃんの知らない所で、じわじわと広がつていいくのでした。

リリアナちゃんは『豊穣の娘』じゃなくて天使様なのに…!



フィルアの村娘 ミーナ（後書き）

知らない人にお菓子をもらつても、ついていったらダメだよ、ミーナちゃん（笑）

## 天使 リリアナ

もう少しで、私も8歳になろうとしています。

数日後に、内輪だけでの誕生日パーティーをする事になり、その中には友達のミーナちゃんも来てくれるそうです。  
ただ心配な事があります。

最近、お母様の体調がよくないんです……。

いつも眠そうで、身体がだるいみたい。

こちらでの医者にあたる治療師の方にみてもうつたら、しばらくこの状態が続くので無理をせずに安静にと言われたそうです。  
なので、誕生日パーティーも辞退したんだけど、リリアナちゃんがまた一つ大人になつたおめでたい日なんだから絶対にやるのよ、と本人に凄い剣幕で言い切られたらやめるなんて言えなくなりました。

この家ではお母様は貴族でありながら、貧乏なので家事をします。  
最低限の使用人を纏めあげ、指示をする。

手があくと、時間がかかりそうな担当の人を手伝つたりとなにかと働くお母様。

そのお母様が動けない今、私が働くかずして誰が働く！！

と、ということで家事のお手伝いをする事にしました。

もともと軽いお手伝いはしてきたんだけど、子供は危ないからつてあんまりお手伝いさせてもらえなかつたんだよね。

前世では母子家庭で、お母さんがバリバリに働いてたから、必然

的に家の事は私がやつてたから家事には自信がありますよーーー

そして、私にはなんとしても改善したい事がありました。

それは料理。

この世界の料理はかなり味氣ないんだよね。  
良くいえば素材本来の味。

出汁も何もないスープやら、素材を焼いただけだったり。

なによりお菓子がない。

あるにはあるが、ドライフルーツがこちらではお菓子の扱いで、  
クッキーもケーキもないのだから涙が出ちゃう。

女の子は甘いものが好き、といふ言葉にもれず私も大のお菓子好きだから。

前に、料理長さんに簡単に作れるクッキーのレシピを渡してこれを作つてとお願いした事があった。

そしたら、固いクッキーが出てきた。

料理長さん……小麦粉の量が多すぎで砕石並なんですね

。

料理長さんは不安そうな顔をして、私をうかがつてたけど頼んだ手前、気合いで食べましたよ。

水は必須だつたけどね。

あれは、いい経験だつたよ。

それから失敗の原因を悟りました。

分量。

つまりは、計量力ツップやrajの調理器具がないからあんな結果になつたんだよね。

それからは、ただただお菓子<sup>スイーツ</sup>の為に情熱をそそいだ。

お父様にあの必殺技をしながら作つて欲しいものがあるの、とおねだりをした。

まあ勝敗結果は予想通りだよね。

でも、これも豊かな食生活の為の犠牲なお父様。

そうして、出来上がつた調理器具をようやくお披露目出来るわ。質素な動きやすい服を着て、調理場に現れた私をみて料理長さんは心配そうにみてきた。

「お嬢様、ここは籠や包丁を使う場所なので危ないですよ。私に任せては頂けませんか?」

「料理長さん、私はあなたの仕事を邪魔するつもりはありません。ただ、お母様が体調が悪く臥せついています……幸いにも食欲はいつも通りなので、美味しい料理を食べてもらい、早く元気になつて欲しくて……そのお手伝いがしたいの。ダメ?」

しゅんとした様子で料理長さんを涙目で見上げる。

「それに、試してみたい料理があるの」

そう言つて、持参した調理器具とレシピを調理台の上にひらげた。料理長さんは、不思議そうに器具を手に取り首をかしげている。

「これはね、調理器具と料理のレシピよ。これさえあれば、誰にでも美味しい料理が出来るのよ。ちなみに今日の献立はポトフとくる

みパン。そしてデザートはロールケーキよ」

料理長さんは初めて聞く料理名に不安そうだけど、絶対に美味しいのよ、お願ひと言つたら渋々頷いてくれた。

「じゃあ、料理長さんは」のレシピをみただけで実行できるかを知りたいからポトフとくるみパンをお願いね。レシピの中にある器具名はこの、器具リストに器具の絵と使い方を書いてあるからそれを参考にしてね。私は、デザートのロールケーキを作るから。竈で焼くときは危ないから料理長さんに声をかけるから、その時はよろしくね」

やつまつと、料理長さんはレシピとこりぬきはじめた。

さて、私も取り掛かりますか。  
まずは、調理台が高いから椅子の上に乗りながら作業をする。  
小麦粉を早速作つてもらつた粉ふるいでふるう。  
別のボウルに、卵と砂糖を入れて泡立て器で力チャ力チャと泡立てていると料理長さんは初めてみる道具が気になるのか、自分の作業をしながらもチラチラと私の方をみてくる。  
が、気にせず作業を継続して焼くところまでいくと、料理長さんに竈で焼いて欲しいと頼むと笑顔で引き受けてくれた。

「料理長さん、昨日お願いしたものは？」  
「ありますよ。でもこれ何に使つんですか？」

渡されたのは、乳を加熱し冷やして分離したクリーム。  
やつぱりお菓子にクリームはかけないつしょ。

「うふふ 出来上がつてからのお楽しみ 」

クリームに砂糖を加えて泡立て器でかき混ぜて味を整える。

そして、竈からスポンジ生地を取り出してもらい熱をとる。

その間、料理長さんの進行具合を確認すると最初は戸惑つてたみたいだけどさすがはプロだね。

順調に進んで美味しそうな匂いが漂いはじめる。

さて、そろそろ冷えたかな。

スポンジ生地に、クリームを塗りくるくる巻いてさらに上にもクリームをこれでもかってくらい塗つて、最後は均等に包丁で切らうとしたら、料理長さんが慌ててやつてきて切ってくれた。

それくらい出来るの。

最後は一切れづつにイチゴを盛り付けて完成!!  
ようやく今世での初お菓子だよ!!<sup>スイーツ</sup>

本当は味見したかったけれど、楽しみは後にとつておくれ派の私は夕食まで我慢した。

パンはもうちょっととかかりそうだな。

でもポトフは出来てるし、とつあえず片付けでもするか。

「お嬢様、片付けは私がやります。料理もあと少しで出来ますのでお部屋で夕食までお待ち下さい」

「片付け位やりますよ。それにお願いした立場としては、最後まで見届けたいし」

結局、危ないからといつ理由で片付けはせぬもんなかつたけれど、初めての調理器具の感想を聞きながら過じていたらくるみパンも完成した。

「よし、時間もいいからんじだし、料理をお母様の部屋に運んでもうだい」

我が家では家族みんなでお食事がルールなので、最近は臥せつているお母様の部屋に料理を運び家族3人で食事をしている。

「かしこまりました。奥方様もお嬢様の料理で早くお元気になりますよ」

「ありがとうございます。今日の料理の感想あとで料理長さんも聞かせてね」

「うちは、使用人も少ないのでみんな同じ料理食べるからね。  
お菓子の感想が楽しみだな。」

そのままお母様の部屋に向かつて、部屋にはお父様もすでにいてイチャついてた。

ちなみにいつもの事なので私も乱入します。

しばらくすると料理が運ばれてきた。

初めて見る料理にお父様とお母様も興味深そう。

「お父様、お母様。今日の料理は私が考えたんです。感想聞かせて下さいね」

「リリアナちゃんの考えた料理ですって、それは楽しみだわ」「お母様のかわりにリリアナは頑張ったんだね。ご苦労様。では、森の実りに感謝していただこう」

「ありがとうございますリリアナちゃん。森の実りに感謝致します」「喜んでもらえてよかったです。森の実りに感謝致します」

「こちらでのいただきますを言つて、一人は料理を一口たべる。」

一人の動きが一瞬止まつたかと思つたが、無言で食べ続ける。

えつ……そんなに不味いかなと思つて、ポトフを一口食べる。

うん、ポトフだよ。

野菜一つ一つの味がちゃんと引き立つて味わい深い味に仕上がる  
てるね。

さてさて、くるみパンはどうだわ？と食べてみると焼きたてだから  
ふわふわして中のくるみも美味しいよ。

……なのに何故この一人は無言なの？？

「うちの人達の味覚には、前世での料理は口に合わないのか？？

「お父様、お母様。お口に合いませんでしたか？？」「めんなさい  
……」

セコでようやく一人は顔を上げ、私をみてくれた。

「リリアナは天才だね。」この料理すごい美味しそよ。こんなに美味しい料理は初めて食べるよ」

「リリアナちゃん」これは料理の革命だわ。お母様は一瞬天国をみた  
わ

讃め言葉は嬉しいですが、縁起でもない事を言つのはやめて下さいお母様。

あつといつ間に平らげられた料理を嬉しい気持ちで眺めながら、  
お父様とお母様にデザートをすすめる。

「これは、デザートのロールケーキです。食べてみて下さい。私が作ったんですよ」

二人は、初めて見るロールケーキを不思議そうにみたあと、フォークでロールケーキを食べた。

「ふんわりした生地に甘いこの白このは何？ 痴みつきになりそうよ。もっと表現したいのに語彙が出てこないのがもどかしい程よ」  
「食事でお腹いっぱいだったけれど、これは別腹だね。何個でも食べれそうだ」

前世の女子みたいな発言はやめてトといお父様。

2人は笑顔でロールケーキを食べている。

待ちに待つこの瞬間。

震える手にフォークを握りしめ、ロールケーキを口に運ぶ。

キタ - - - - !

これだよこれ！ 苦節約8年田にしてのお菓子<sup>スイーツ</sup>…！

これまでのお菓子<sup>スイーツ</sup>断ちは辛かつたよ。

これからは、毎日でも食べてやる。

「お父様、お母様。これからも私が料理をしてよいですか？？」

満場一致で料理権を勝ち取りました。

た。そして、数日後の誕生日パーティーでお母様が爆弾を投下しました。

文字通り爆弾を投下した訳じゃないですよ？？

「リリアちゃんへのプレゼントはこれですね」

お母様は自分のお腹に両手を当てて笑顔で言いました

「リリアナちゃんに弟か妹が出来ます」

つて、お父様まで驚いてるじゃないですか！

「リリアナちゃんは嬉しいの？？」

母様。 いやいや 姉いじりまつたの報告刀酒に利にせん。 金にすらあ

「アリス、今の話は本当？」

「あら、ルイス。貴方まで喜んではくれないの？？」

そう言つて、いじけはじめのお母様。

「そんな事あるわけないだろ。リリアナという可愛い娘だけじゃなく、もう一人私の子を生んでくれるだなんて、君には感謝してもしきれないよ」

そういうお母様を大切そうに抱擁し、頬にキスをする。

はい。

相変わらずのバカツプルですね。  
でも、私も寂しいから混ぜろーーと乱入する。

弟か妹が生まれる事になりました。

最近具合が悪そうだなと思っていたら、お母様は妊娠初期の症状でいつも眠そでだるかったみたい。  
治療師の方にも驚かせたいから内緒にして下さい、って口裏をあわせていたらしい。

「リリアナちゃんお誕生日おめでとう。弟か妹が出来るんだね。奥方様もなんともなくつてみかったね」

ミーナちゃんは、私の手を握りながら笑顔で一緒に喜んでくれる。

「あれ、リリアナちゃん。手に傷があるよ

「ああ、料理した時に包丁でちょっと切っちゃったんだ」

まあかすり傷だし、すぐ治るしね。

むしろ、前世で自称主婦を自認してたのにプランクがあるにしても切った事実が衝撃だつたよ。

料理長さんの目を盗んでの行動だつたからバレないようこ隠したけどね。

ミーナちゃんをみると、まるで自分が傷ついたと思つほど悲しい顔をしてくる。

「リリアナちゃん、ミーナが治してあげるね。我願う、リリアナちゃんの傷を治したまえ」

傷ついた手の上に、ハーナさんが手をかざすとほのかな温もりを感じた。

ミーナちゃんがにつこり笑つて手をどかすと……あら、不思議。そこには傷も何もない手がありました。

「えええ  
- - - - - . . . . .

ミーナちゃん私に何をした - - - - ! !

天使 リリアナ（後書き）

一つ名に悩んでいたら、一つ名メーカーなるサイトを発見し、リリアナの名前を入れてみると・・・

呻く領域  
アンダーグラウンドリトリー

何をしたらそんな二つ名がつくんだリリアナ（笑）

## 食堂の女主 マリア

私の名前は、マリア・シエリスタ。

はつきり言おひ。偽名です。

本当の名前は、マリア・リーシュ。

今では大きな商会に発展したリーシュ商会の末娘として生をうけ、数奇なる運命の末に王都ローレリアにて食堂の女主として生計を立てているのだから、人生とは不思議なものである。

リーシュ商会を束ねる父さんには家を出るとき勘当され、私は行方をくらませた。

それからもう32年。

今では立派な食堂のおばちゃんだ。

「お久しへりね兄さん。元気そつでなによりだわ

生家とは行方をくらませた後、連絡をとつていなかつたが数年前から私の居所を掴んだ兄さんは、時々私のもとへあらわれる。

兄さんは手に大きな箱を持ち、箱を私の目の前のテーブルに置いた。

「マリア、君も元気そつでよかつたよ。頼まれものだ」

「兄さんいつもすまないわね。様子はどうだったかしり？」

「担当の話を聞くと幸せそうにやつていてるらしい。誰に似たのかお人好しそうでどうなる事やらと心配していたが

「うふふ、それはよかつたわ。随分と大きい箱ね。開けるのが楽し  
みだわ」

箱を開けると、そこにはみた事もない道具と紙の束、手紙が一緒  
に入っていた。

「兄さん、何かしらこれ？」

「何かの道具みたいだがやけにたくさんあるな。マリア、手紙を読  
んでみたらどうだ」

それもそつだと思つて箱から手紙を抜きとり、開封する。

それは、手離さなければならなかつた懐かしい息子の字で流暢に  
書かれた手紙だつた。

母さん、久しぶりだね。

商会から母さんの手紙を預かつたよ。  
相変わらず元気そうでなによりだよ。

だからといって、無理して身体を壊したりしないでくれよ。  
最近、妻の体調が悪くて臥せつてゐるんだ。

心配した可愛い天使は、お母様の為にといって家事の手伝いをす  
るようになつたんだ。

特に、料理への入れ込みようはすごかつた。  
みた事もない道具を作つて欲しいと言われたから、作らせてみた  
らその道具は調理器具だと言つんだ。

早速、料理長と一緒に調理器具を使って料理を作ったんだ。

不味くとも、僕らの可愛い天使が作った料理だから、全部食べなければと覚悟していた。

そしたら、今まで母さんの作った料理が一番だと思っていたが、天使の料理は素晴らしい美味しくて讃める事も忘れて夢中で食べてしまつたよ。

料理上手は母さんに似たんだろうね。

私達夫婦はもちろん、使用人達も料理に感激して、これは神々の食卓の料理だと絶賛していたよ。

暇さえあれば使用人達は調理室に通い、料理を教わつて里帰りの時に家族に神々の食卓の料理を味わつてもらおうと、必死なくらいなのだから。

そんな状況を知つた天使は、みんなにレシピと調理器具をあげたんだ。

レシピというのは調理法を記したもので、そのレシピをみながら調理器具を使って料理すると、誰にでも美味しい料理が出来るらしい。

母さんにも、料理を味わつてほしくて箱の中に調理器具とレシピをいれておいたよ。

あと、妻の体調が悪いと書いただろ。

天使の誕生日パーティーに妻は最高のプレゼントをあげたんだ。なんと天使に弟か妹が出来るつて言うんだ。

私達の天使が来年にはもう一人増えて、天使達になるんだ。母さんにも、いつか天使達を見せたいよ。

読み終わると兄さんがハンカチを用意してくれていた。  
息子からの手紙を読む時は、いつも涙が出てしまつ。

「マリアは本当に涙もろいな」

「あら、これは嬉し泣きだからとても幸せな事なのよ。素晴らしい事に来年にはもう一人天使が増えるらしいわ」

「もう一人産まれるのか。それは、めでたいな。マリア、もう会つてもいいんじゃないのか？ あの時とは状況が違う」

私は、ハンカチで目元を拭いながら首を横にふる。

「ダメ。私は最後まで守れなかつたのだから会う資格なんかないの。私のような平民と血の繋がりがあるとわかつてはいけない。本来は手紙のやり取りすらするべきではないのに」

私と繋がりがある事が露見してはいけない。

なのに、息子と兄さんの好意に甘えてしまつて少しでも繋がりを持とうとする自分が浅ましい。

「ところで、この道具は何だつたんだマリア？」

兄さんは重い雰囲気を変えるように言った。

まあ、もともと気になつていたのでしうね。

商人の悲しい性ね。

「この道具達は調理器具で、紙の束はレシピという調理法を記したものらしいの。この調理器具やレシピは天使が考えたんですつてよ。この通りつくつたら、天使が作った味を再現できるらしいわ」

「この道具は調理器具だったのか。でも子供の考えた事だろ」

「兄さん、馬鹿にしてるの？ むこうの使用人達は、天使の料理を神々の食卓の料理と言つほど絶賛してゐる腕前らしいわよ」

「それは聞き捨てならないな。マリア、そのレシピから何か作つてくれよ」

「もう、仕方ないわね」

天使がつくりたレシピの中から『鶏のにんにく風味ソテー』と書かれたレシピを抜きとり、記されてる通りに調理をする。

美味しくなるコツは、焼くときはオイルを多めに鶏肉がカリカリになるまで焼く事らしい。

食堂には美味しそうなにんにくの香ばしい匂いが充満し、兄さんは食べたくてうずうずしている。

レシピに書かれている通り、カリカリに焼き上げると皿に盛り付け兄さんの前に皿を置く。

「これが兄さんの分ね。森の実りに感謝致します」

「随分、美味しそうない匂いだな。森の実りに感謝致します」

同時にフォークで差した鶏肉を口にはじぶ。

口にした瞬間二人して、動きがとまり絶叫していた。

「「美味しい - - - - ! !」」

「おい、マリアこれは確かに神々の食卓の料理だ!! こんなに上手いものは初めて食べた」

「さすがは天使ね！ これは神々の慈悲だわ。本当に天使が私達のもとへ授けて下さった料理に違いないわ」

「レシピ通り作ればこんな美味しい料理ばっかりつて事か？」

「手紙通りだとしたらそういう事になるわね」

「これは、王国中に広めるべき料理だ。このレシピと調理器具さえあればこの味が出来るだなんて素晴らしいすぎる。マリア、このレ

レシピと調理器具をぜひ商会で販売したい」

兄さんの商魂が刺激されたらしい。

確かにこんな絶品料理が誰にでも作れるのだから、絶対大繁盛だ。

息子からの手紙にはいつだって幸せな事しか書かれていない。

しかし、私は噂で知っている。

かの領地経営が火の車な事も、幸せな事ばかりではなかつた事も。

息子には事後承諾にはなるが、兄さんに販売の許可を出した。  
もちろん利益の半分は、かの領地に納める事を約束させた。  
腐つても、私も商人の娘だしね。

それからの兄さんの行動は早かつた。  
調理器具とレシピを私から借りるとすぐに作りせにかかつた。  
さすがは、ここ数十年で王国屈指と名高いリーショリ商会を築き  
上げた人物の一人だ。

レシピは『天使の贈り物』という題名で、調理器具と一緒に販売  
された。

売り出される頃には、商会の傘下の食堂で提供されていた料理は  
すでに話題になつてあり、レシピと調理器具は即日完売。

レシピと調理器具は大量生産するも追いつかず、料理の評判は高  
まるばかりだ。

後に、王国の家庭に料理は浸透し、料理は王国でも提供されるよ  
うになる。

各国の賓客は料理に舌鼓をうち、自国で我が国の料理の評判をさ  
らに高めてくれた。

私の食堂も天使が教えてくれたレシピを店で提供し、店から感激の絶叫が絶える事はなかった。

そして、客は必ず私に「いついつのよ。

「マリア、この料理よりも美味しいものは食べた事がない……」

「当たり前よ、可愛い天使が考えたのだから」

## 記念小話 わる高貴な方のお忍び（前書き）

お気に入り登録2000件、ユニークアクセス10万人突破記念小話です。

読者の皆様、いつも小説を読んでいただきありがとうございます。

これからも未熟な作者ではありますが、頑張っていきます^\_^(一  
一)^\n

## 記念小話 もの高貴な方のお忍び

光あれば、闇があり。

闇あれば、光あり。

闇の部分を担い暗躍する部隊『暁』は、諜報や潜入は当たり前。その情報はどんな些細な内容でも拾い上げ、主に報告をする。

そして、今日も主の琴線に触れた情報があつたようだ。

今、非常に自分の軽率な行動を後悔していた。

数人の柄の悪そうな男達が、俺の少し離れた場所から付きまとつて来ているからだ。

ただのごろつきなので、相手をするのに不足はない。

しかしながらここは大通り。

そんな場所で派手な立ち回りをし、目立つ訳にはいかない。

あえて、裏路地に入つて倒すかと考えていると、俺の右腕に何者がが触れた。

「私に付いてきて下さい。彼らを撒きます」

右腕に触ってきたのは、品の良さをうな40代後半位の女性だった。

予想外な出来事に呆気にとられないと、女性は俺の手を引っ張

り大通りに面した、あるお店に入つていぐ。

さすがに、柄の悪そうな男達は店の中までは入つて来なかつた。店は服飾店だつたらしく、といふ狭しと服や生地が並べられている。

そして、服に埋もれるように一人の老婆がいた。

「店主お久しぶりね。悪いけど、裏口を借りるわ

「久しぶりに若い男を連れて顔をみせたと思ったら訳ありかい。いいよ、使いな」

「ありがとう。今度は、ちゃんとお話しにも付き合つから今日は許してちょうだい」

老婆からの許可をもらつと、女性は客のいない店の奥に進みだし、俺の背の半分ほどしかない小さな扉の前に立つた。

「これが、裏口になります。扉を出ると、先程の大通りからのびている小さな小道に出来ます。小道を左に真つ直ぐ行くと、大広場に出来ますので、そこまで行けば道も分かりましょ。御身は唯一の存在なのですから、ご自重下さいませ」

「俺の正体がわかっているみたいだな。何故分かつた」

女性は、口元に手の甲を持つていき微笑んだ。

「変装はお見事です。しかしながら完璧過ぎるので。一般的の者はわからないでしょうが、力がみえる者にとっては、元の姿をみる事が全く敵わない人物となると限られるのですよ。ちなみに、先程のようないごろつきに目を付けられたのは、拳措が優雅すぎるのです。下に降りられる際は、変装だけでなく、粗野とまでは申しませんが平民の動作を身に付けるべきです。でなければ、今回のようないごろつきならばまだ良いですが、後ろに余計な者を連れてきてしまいま

す。以後、お気をつけ下さませ」

女性はさう言つと、王宮の淑女よりも上品で流麗な動作でお辞儀した。

「お気遣い感謝する。貴女も色々訳ありだな」

「私は、ただ人より勘が良いだけにすぎません」

「この分だと料理は無理そうだな」

今回の目的を断念する言葉を口にする。

すると、女性は体をピクッと震わせ反応する。

「料理と言いますと、まさかあの？」

王都ローレリアでは、最近話題になつてゐるものがある。

それは料理だ。

王國屈指の商会と名高いリーシェリ商会が発売した、レシピと呼ばれる調理法が記された『天使の贈り物』という本と調理器具が大人気で入手困難になつてゐるらしい。

その本に掲載されている料理は、神々の食卓の料理に違いないと絶賛されているといふ。

一度は食べてみたい。

そう思つた俺は、変装して市井の生活をのぞきみる事も兼ねて、

その料理が提供されている食堂へ向かつていた。

結果は、自らの行動を後悔する事になつただけだが。

「ああ、巷で今話題の『天使の贈り物』がどのようなものか食そ  
うと思つたんだが……また出直すとしよう」

女性は、長い溜め息をついた後にだからお人好しかばは争えな  
いとか言われるのよとブツブツ呟いたかと思ったら、俺に向けてに  
こやかに微笑んだ。

「私はただ勘が良いだけでなく、ただの食堂の女主でもあるのです。  
どうせここまで来たのですから、私が可愛い天使の料理を振る舞い  
ますわ」

そう言つて、小さな裏口の扉は開かれた。

その日、『暁』に密命が下る。

リーシュリ商会の『天使の贈り物』と調理器具を入手せよ。

記念小話　わぬ高貴な方のお忍び（後書き）

かくして、上流階級に料理は漫透していくのでした（笑）

小話なのでちよつと遊んじやいました。

次回は本編に戻つてリリアナのターンとなります。

**神童 リリアナ 1(前書き)**

話が長くなつたので、区切りのこい所で一話にしたので短いです。

「容赦下さこませへ（――）へ

「」の世界には魔法がありました。

「「お」じょ」「」ーちゃん何したの？？ まるで魔法みたい！！」

「」ーちゃんが、私の傷を治したのに驚いて思わず「冗談で言つてみた。

「 もううん魔法だよ」

「」ーちゃんは頷くと、当たり前のよひに言つた。

「す」「い！ す」「こ」「よ！ じゃあ魔法で空を飛んじゃつたり、いろんな事が出来ちゃつたりするの？？」

私は興奮状態。

だつて、魔法なんておどぎ話とか本の中でのお話で、魔法が使えたならあつて絶対一度は思つた事あるでしょ？ それが実際に使えるなんてす」「さぎる。

「うへん。力がかなり強い人なら空も飛べるらしいよ。魔法は、誰にでも使って人それそれだから、確かにいろんな事ができるかもね」「そなんだ！ じゃあ私も、もしかしたら空を飛んだり、」ーちゃんみたいに傷を治したり出来るかもしれないんだね！」

私は、」ーちゃんの両手を掴んで、まるで獲物を追いかける捕獲者のように詰め寄った。

「ねえねえ、どうやって使うの？ 私も使いたい！！」

「……リリアナちゃん、もしかして魔法の事知らないの？？」

ミーナちゃんが戸惑いながら言ひ。

その言葉を聞いた途端興奮から一転、冷水をかけられた気分に陥つた。

この世界では、魔法を使える事は常識だつたみたいです。

前世では魔法は空想の中での話で、現実ではなかつた。

だから、私は使えない事が当たり前だと思って、知りうともしなかつた。

私は、この世界の事を何も知らない。

私は伯爵家の娘として生をうけた身。

貧乏伯爵家とはいえ、領民の働きのもと、私は今の生活を享受している。

私達の為に領民がいるのではない。

領民の為に私達がいる。

何も知らないで、誰かを救う事など出来るはずがない。

だから、今後も知らなかつたでは済まされない。

知らない事が罪なのだから。

それが、高貴なる者の義務だ。

（フレス・オブリージュ）

私は、両親の手助けをすると決めた時、現状の確認が必須と言つたくせにこの1年何をしてきた？

ミーナちゃんと遊んだり、料理のレシピを思い出せるだけ書き出してみたり、結局は何もせずに毎日を無駄に1年過ごしていた。

「」のままではいけない。

その日は眠れない夜となつた。

翌日、私は決意を胸にお父様の書斎を訪ねた。

「お父様にお願いがあります。私、勉強をしたいです。この世界の事を知りたいです」

「リリアナ、突然どうしたんだい？」

「お父様、私は何も知らない事を知りました。この世界には魔法がある事すら知らなかつたのです。自分が恥ずかしいです」

私が、しょんぼりしていたらお父様が手招きをしてきたのでお父様が座つている椅子に近寄つた。

お父様は少し屈んで、私と目線を合わせてくれた。

「じゃあ家庭教師を雇おうか。リリアナは偉いよ。ちゃんと知らない事に気付いたのだから」

「お父様は優しすぎます」

お父様は、知らないからそういうやつて優しい言葉をかけてくれる。本当は私、精神年齢はもう24歳なんですよ。そつはみえない位に未だに子供だけど。

「でも、家庭教師なんか大丈夫なんですか？」

忘れてはいけないのが我が家が貧乏伯爵家という事実だ。さりげなく、お金の心配をしてお父様をうかがう。

「リリアナはそんな心配しなくていいんだよ」

「変な心配をしてごめんなさいお父様」

「いや、私こそリリアナに謝らなければならない。『ごめんよ』

そう言つと、お父様の大きな手が私の頭を撫でてきました。

前世では、こんな風に男性に頭を撫でられた事がなかつたからすゞぐくすぐつたたい気持ちになる。

「ちよつび、私の恩師のお弟子さんが王都にいられなくなつたから、良い働き口はないかつて相談されていたんだ。その人にリリアナの家庭教師を頼もう」

お父様……王都にいられなくなつたつて問題じやないですか。

家庭教師の件は嬉しいですが、本当にその方大丈夫なんでしょうか……。

家庭教師としてやつてきたのが、田の前の青年だ。

「私は、シリウス・レオドールです。今日からお嬢様の家庭教師を勤めます」

「はじめて先生。レオドール先生とシリウス先生のどちらでお呼びすればいいですか？」

雰囲気的には、名前で呼ぶより姓であるレオドール先生で呼んだ方が良さそうなタイプだけね。

先生は、黒髪と藍色の瞳の持ち主で、顔立ちは冷たそうな印象の美形な25歳の青年でした。

オプションで眼鏡とか似合いそうな人です。

残念ながらこの世界には眼鏡がないのが悔やまれます。

それにもしても、この世界の人は皆さん美男美女ばかりで、レベルが高いです。

「レオドールでお願い致しますお嬢様」

あつ、やつぱりね。

「私はリリアナと申します。これからよろしくお願い致します。レオドール先生」

先生は、一体何をして王都にいられなくなつたのか気になるけど、人には聞かれたくない事もあるからね。

冷たそうな印象だけど、何となく悪い人じやないと思つんだ。

「レオドール先生。私は恥ずかしい事に何も知らないのです。世界の成り立ちも何もかも」

「お嬢様は、自分が無知な事を理解しています。その様に言うのも勇気がいる事です。知らないのに知つてゐるよつに振る舞う事こそ愚か者ですよ」

「だつて聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥ですから」

「その言葉は……？」

先生は不思議そうに聞いてきた。

「知らない事を聞くのは恥ずかしいですが、知らない今までいるのは一生恥ずかしいという意味です」

「なるほど。一理ありますね。リリアナお嬢様、席にお座り下さい。勉強をはじめましょう。まずは、この世界がどの様に出来たのか神話をお話しましょう」

た神々を。

創造神たる神が寂しくないように、子である神々も子を産み数多  
なる神が誕生した。

創造神は、大地に動物や草花なども創造した。  
やがて、自らの姿に似せた人を創造した。

しかし、人は一人で生きていくには弱く脆い存在。  
そんな弱き人へ、創造神は願いを叶える力を与えた。  
それが魔法だ。

魔法の力を使い人は繁栄した。

人は自らを創造した神と神々を崇拜し、神々も人を自らの子のよ  
うに愛し、助けた。

神の寵愛が深い者はより強い力を持ち、神の愛し子と呼ばれた。  
神の愛し子のもとへ人は集い、国となり、大陸に多くの国々が建  
国した。

神は自らの愛し子が建国せし国に、加護を与えた。  
しかし人は欲深く、更なる大地と力を求め、神々を交えた争いが  
勃発した。

創造神は嘆いた。

自らの子同士が争いあう事を。

創造神にとつて創造した神や人は、等しく自らの子だつたから。  
創造神は神に地上へ降り、直接力を振るう事を禁じた。

人へは国境を越え争う事を禁じた。

辻を破る者には制裁を加えた。

創造神は、力を取り上げたのだ。

それは魔法の力と加護の消失を意味した。

願いは叶わず、加護は失われ、大地と人心は荒れていった。

人は自らの行いを悔い改めた。

そして、人はまた願う。

豊かな大地で平和に暮らしていたあの日々を。

願いは天まで届き、創造神は慈悲を与えた。

過ちを繰り返す事なかれ。  
さすれば加護を約束しよう。

しかし、また繰り返す事あれば、再び大地に混沌が訪れる。

神の名を呼ぶことなかれ。

神は人と大地に加護を与える事は出来るが、地には降りる事が叶わないのだから心を揺り動かす事を許さず。

人が呼んで良い名はただ一つ。

我、セイルレーン創造神のみ。  
世界の名はセイルレーン。

「こうして、神々の名は秘されました。各国にはそれぞれの神の加護があり、私達人は神の教えを守る事で魔法を使う事が出来るのです」

願いを叶える力なんて凄すぎます。

やっぱり魔法は必修だね。

「ちなみに、私達が住んでいるこのシェルフィールド王国は美と愛と豊穣の女神に守護されている国です。それ故にこの国の加護は他国と比べ、見目麗しい者が多く、作物なども収穫量が多くなっています」

美形が多いのは、お国柄だつたんですか先生！？  
道理で美形が多い訳ですよ。  
謎が一つ解決しました。

「他国では知恵や工芸、学芸の女神の加護は知能が高く、それ故に知略に優れていますが体力はありません。戦いの男神の加護は、力が強く体力はありますが、逆に知には劣ります。わかりやすい例はこんなところで、他にも様々な加護を受けている国があります。お嬢様、何か質問はありますか？」

「はい、先生の話の展開が早すぎます。

私が本当の意味で8歳だつたら絶対理解出来てませんからね、先生。

「レオドール先生、地図はありませんか？ 実際にみてみなければ他国との位置関係が難しいです」

「それもそうですね」

先生は、教材等を入れていた箱の中から見慣れた物を取り出し、私の目の前に置いた。

「地球儀！？ いや、でもここはセイルレーンという名の世界だからセイルレーン儀？ でも世界の大地が球体である事は変わらないから地球儀でいいの？？」

先生が取り出した物は地球儀でした。

球体の部分をよく見ると、やっぱり前世と大陸の形が違う。

そして、大陸の形が不自然なまでに大きい。

おそらく、認知されていない大陸とかがあつて、そここの部分がごつそり抜けてしまつてるからなんだろうな。

そんなふうに考えていると、レオドール先生がいきなり私の両肩をガシッと掴んできた。

「何故、世界が球体である事を知つていてはおかしいとこつ事は……。  
「えつ？」

世界が球体である事を知つていてはおかしいとこつ事は……。

世界は丸い。

恐らくまだ、このセイルレーンでは世界が丸い事が立証されていないんだ。

立証されていなければ、球体じゃなくて、半円球や平たいと思つても不思議じやないのだから。

いや、でも美形がお国柄とか言つちやう世界だから変な形でもおかしくないのかも。

あと、先生の口調が変わつたけれどそれが素なのかな？

「レオドール先生は、どうして球体と思つたのですか？」「船で沖から陸に近付くと、遠くに見える山の頂といつた高い物から先に見え、裾野は陸地に近付かないと見えないからだ。あとは、月の神隠しで隠れるのが球体だ。だから、世界は半円球等ではなく、球体だと確信している」

「月の神隠し？」

神隠しつて突然行方不明になる事だよね……。

「年に一、二回位しかないが、月が黒い影に隠れていく現象だ。月が全部隠れる時もあれば、部分的な事もある」

「ああ！ 月食ですね！」

「月食？？」

「先生が言つていた、月の神隠しの現象の事です。太陽を軸に世界

は回っていますが、太陽とセイルーレーン、月が一直線に並ぶ為にセイルーレーンの影が月にあたり、明るさを失った状態の事ですよ」

丸い事を証明しなさいと言われても、宇宙から世界をみたら丸いと言えるけれど、この時代に宇宙船なんかあるわけないもんね。確かに、先生の言つた内容で球体だと言える。

説明しなさいと言われても、簡単そうで意外と難しいのに先生は凄い。

先生は、私の両肩を掴んだ手をゆっくりと離していく。

「……地動説か。それは私が説き、王都にいれなくなつた原因だ」

地動説！ 先生は、異世界版ガリレオ・ガリレイなんだ！！

先駆者の多くは、世の中から初めは認めてもらえず誰もが笑つた。だけど、先生は決して笑われていいような人なんかじゃない。先生は正しい事を説いただけなのだから。

「レオドール先生。人は、半歩か一步先の事は受け入れる事が出来ます。しかし、飛び越えた先はわからない為に人は受け入れる事が出来ないものです。先駆者とは、世の中の流れに逆らう者が次の流れを作り出すのです。時代が進み、技術が進歩すれば先生が正しい事は証明されます」

だから私は世界が球体である事も、太陽を中心に惑星が軌道を描いている事も知っているのだから。

「私、レオドール先生に師事出来る事になつて良かった。先生のようないい貴重な方に、これからたくさんの事を教えていただけるのかと

思つと嬉しいです。王都で先生の価値をわかつていない人達など、ざまあみろです。でも、先生を独り占め出来るのですから、私は役得ですね

先生はぽかんとしている。

美形な先生には、そんな表情似合わないと思つていると、先生は両手をお腹にあて、くの字になつていきなり大笑いしあじめた。

びっくりして今度は私がぽかんとしてしまう。

「お嬢様、口が悪いですよ。それにしてもこんなに笑つたのは初めてだ」

私は頬つぺたを丸くして、先生を睨みつける。

「そんなに笑わなくともいいじゃないですか。私は、思つた事を正直に言つたままでです」

笑いがようやく治まつた先生は、さつきの大笑いが嘘のように姿勢を正し、私を見つめてきた。

「口が悪いお嬢様には、確かに教育が必要ですね。私は、王都に戻る事はしばらく出来ないので、これから長い付き合いになりそうです。ですから、やはりレオドールではなくシリウスとお呼び下さい」

「シリウス先生ですね。では、私の事もお嬢様ではなく、リリアナと呼んで下さい」

「リリアナ様と呼ばせていただきます」

私はにっこりと笑つて、先生に右手を差し出した。

「シリウス先生、これからよろしくお願ひ致します

シリウス先生も自らの右手を差し出し、私の右手を握ってくれた。

「リリア様、こちらこそこれからよろしくお願ひ致します。そして、ありがとうございます」

そう言つて笑った先生の笑顔は、とても穏やかだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3791w/>

---

えっ？平凡ですよ？？

2011年10月8日03時10分発行